

日蓮大聖人御書全集

そやじろうにゆうどうどのごへんじ

曾谷二郎入道殿御返事

新版  
1448  
〜  
1454

そやじろうにゆうどうどの「へんじ

# 曾谷二郎入道殿御返事

こうあん ねん

弘安4年（'81）

うるう がつ ち

閏7月1日

さい そやきようしん

60歳 曾谷教信

にちれん

日蓮

い しちがつじゅうくにち しょうそく どうさんじゅうにちとうらい

去ぬる七月十九日の消息、同三十日到来す。

せけん

世間のことは、しばらくこれを置く。専ら仏法に逆らう

ほけきよう だいに い

こと、法華経の第二に云わく「その人は命終して、阿鼻獄

い とううんぬん

に入らん」等云々。

と ひと

問うて云わく、「その人」とは、何らの人を指すや。

こた

い つぎかみ い われいちにん

答えて云わく、次上に云わく「ただ我一人のみ、能く救護

きようしよう

をなす。また教詔すといえども、信受せず。また云わく

しんじゆ

ひとしん

「もし人信ぜずして」。また云わく「あるいはまた顰蹙し

ひんしゆく

きよう どうじゆ しよじ

もの み

て」。また云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、

きようせんどうしつ

けつこん いだ

だいご い

うたが

軽賤憎嫉して、結恨を懐かん」。また第五に云わく「疑い

しよう しん

すなわ まさ あくどう お

だいほち

を生じて信ぜずんば、即ち当に悪道に墮つべし」。第八に

い ひとあ

きようき なんじ おうにん

云わく「もし人有つてこれを軽毀して『汝は狂人なるのみ。

むな ぎよう な

つい う

い

空しくこの行を作して、終に獲るところなからん』と言わ

とううんぬん

ば」等云々。

ひと

ひとびと

さ

か しんたんこく

「その人」とは、これらの人々を指すなり。彼の震旦国の

てんだいだいし なんぼく じつしとう さ にほんこく でんぎよう

天台大師は、南北の十師等を指すなり。この日本国の伝教

だいし ろくしゆう ひとびと さだ

大師は、六宗の人々と定めたるなり。

いま にちれん こうぼう じかく ちしようにう さんだいし

今、日蓮は、弘法・慈覚・智証等の三大師ならびに三階・

どうしやく ぜんどうとう さ

道綽・善導等を指して、「その人」と云うなり。

あびごく い ねはんぎようだいじゆうく い

「阿鼻獄に入らん」とは、涅槃経第十九に云わく「たと

いちにんひと ごく お みちようだい

い一人独りこの獄に墮つるも、その身長大にして八万由延

なか へんまん あいだ むな ところな みしゆうそう

なり。その中に遍満して、間に空しき処無し。その身周匝

しゅじゅ く う たにん あ み へんまん

して種々の苦を受く。たとい多人有つて身また遍満すとも、

あいぼうげ どうさんじゆうろく い じんもつ あびじごく あ

相妨礙せず」。同三十六に云わく「沈没して阿鼻地獄に在つ

て、受くるところの身形、縦広八万四千由旬ならん」等

うんぬん

ふげんぎよう

い

ほうどうきよう

そし

だいあく

ほう

云々。普賢経に云わく「方等経を謗る。この大悪の報は、

まさ

あくどう

お

ぼうう

す

ひつじよう

まさ

応に悪道に墮つべきこと暴雨にも過ぎ、必定して当に

あびじごく

お

とう

あびじごく

い

もん

阿鼻地獄に墮つべし」等とは、「阿鼻獄に入らん」の文なり。

にちれんい

そ

にほんこく

どう

しち

くに

ろくじゅうはつかこく

日蓮云わく、夫れ、日本国は、道は七、国は六十八箇国、

こおり ろびやくし

ごう

いちまんよ

なが

さんぜんごひやくはちじゅうしちり

郡は六百四、郷は一万余、長さは三千五百八十七里なり。

にんずう

しじゆうごおくはちまんくせんろつびやくごじゆうくにん

い

人数は四十五億八万九千六百五十九人、あるいは云わく

しじゆうくおくまんしせんはつびやくにじゆうはちにん

てら

いちまんいつせんさんじゆうしち

四十九億九万四千八百二十八人なり。寺は一万一千三十七

しよ やしろ さんぜんいつびやくさんじゆうにしゃ

いま

ほけきよう

あびじごく

所、社は三千一百三十二社なり。今、法華経の「阿鼻獄に

入らん」とは、これらの人々を指すなり。

問うて云わく、衆生において悪人・善人の二類有り。

生処もまた善悪の二道有るべし。何ぞ日本国の一切衆生

一同に「阿鼻獄に入らん」の者と定むるや。

答えて云わく、人数多しといえども、業を造ることこれ一

なり。故に同じく阿鼻獄と定むるなり。

疑つて云わく、日本国の一切衆生の中に、あるいは善人、

あるいは悪人あり。善人とは、五戒・十戒、乃至二百五十戒

等なり。悪人とは、殺生・偷盜、乃至五逆・十悪等これ

なり。何ぞ一業と云うや。

なん いちじょう い  
こた い そ しょうぜん しょうあく こと

答えて云わく、夫れ、小善・小悪は異なりといえども、

ほけきよう ひぼう ぜんにん あくにん ちしや ぐしや さまた

法華經の誹謗においては、善人・悪人、智者・愚者ともに妨

な ゆえ おな あびごく い

げこれ無し。この故に、同じく「阿鼻獄に入らん」と云う

なり。

と い なに にほんこく いっさいしゆじよう いちじょう

問うて云わく、何をもつてか、日本国の一切衆生を一同

ほつけひぼう もの い

に法華誹謗の者と言うや。

こた い にほんこく いっさいしゆじよう しゆた

答えて云わく、日本国の一切衆生、衆多なりといえども、

しじゆうごおくはちまんくせんろつびやくごじゆうくにん す ひとびと

四十五億八万九千六百五十九人に過ぎず。これらの人々、

きせんじょうげ しょうれつあ

ひとびと たの

貴賤上下の勝劣有りといえども、かくのごとき人々の憑む

さんだいし あ

さんだいし はな

ところは、ただ三大師に在り。師とするところ、三大師を離

よざん ものあ

しんぎよう ぜんどうとう

るることなし。余残の者有りといえども、信行・善導等の

いえい

家を出ずべからざるなり。

と い さんだいし たればと

問うて云わく、三大師とは誰人ぞや。

こた い こうぼう じかく ちしよう さんだいし

答えて曰わく、弘法・慈覚・智証の三大師なり。

うたが い さんだいし じゅうかあ

疑つて云わく、この三大師はいかなる重科有るによつて、

にほんこく いっさいしめじょう きようもん ひと うち い

日本国の一切衆生を、経文の「その人」の内に入るるや。

こた い さんだいし だいしようじょうじかい ひと おもて

答えて云わく、この三大師は大小乗持戒の人、面には

はちまん いぎ そな さんぜんとう ぐ けんみつけんがく

八万の威儀を備え、あるいは三千等これを具す。顕密兼学の

ちしや すなわ にほんこくしひやくよねん あいだ かみいちにん

智者なり。しからば則ち、日本国四百余年の間、上一人よ

しもばんみん いた あお にちがつ

り下万民に至るまで、これを仰ぐこと日月のごとく、これ

たつと せそん とく たか しゅみ

を尊ぶこと世尊のごとし。なお、徳の高きことは須弥にも

こ ちえ ふか そうかい す

超え、智慧の深きことは蒼海にも過ぎたるがごとし。ただ

うら ほけきよう だいにちしんごんきよう あいたい しょうれつ ほん

し、恨むらくは、法華経を大日真言経に相對して勝劣を判

とき けろん ほう い だいに

ずる時は、あるいは「戲論の法」と云い、あるいは「第二」

だいさん い きようしゆ むみよう へんいき な

「第三」と云い、あるいは教主を「無明の辺域」と名づけ、

ぎようじや ぬすびと な か だいしようごんぶつ まつ

あるいは行者をば「盗人」と名づく。彼の大莊嚴仏の末の

ろっぴやくしまんおくなゆた ししゆ

おのおの ごういんこと

六百四万億那由他の四衆のごとき、各々の業因異なりとい

し くがんとう しにん

おな むけんじごく い

えども、師の苦岸等の四人とともに同じく無間地獄に入り

しし おんのうぶつ まつぼう むりようむへん でしとう なか

ぬ。また師子音王仏の末法の無量無辺の弟子等の中にも、

きせん こと あ おな しょうい でし

貴賤の異なり有りといえども、同じく勝意が弟子となるが

ゆえ いちどう あびだいじよう お いま にほんこく

故に、一同に阿鼻大城に堕ちぬ。今、日本国またまたかく

のごとし。

い えんりやく こうにんねんちゆう でんぎようだいし ろくしゆう でしだんなとう

去ぬる延暦・弘仁年中、伝教大師、六宗の弟子檀那等

かしやく へいば い し お でし

を呵責する語に云わく「その師の堕つるところ、弟子もま

お でし お お だんおつ お こんく みようせつ

た堕つ。弟子の堕つるところ、檀越もまた堕つ。金口の明説、

つつし

つつし

とうとうんぬん

慎まざるべけんや、慎まざるべけんや」等云々。

うたが

い

なんじ

ぶんさい

なに

さんだいし

は

疑つて云わく、汝が分齊に、何をもつて三大師を破す

るや。

こた

い

よ

か

さんだいし

は

答えて云わく、予はあえて彼の三大師を破せざるなり。

と

い

なんじ

かみ

ぎ

問うて云わく、汝が上の義は、いかん。

こた

い

がつし

かんど

ほんちよう

わた

きようろん

答えて云わく、月氏より漢土・本朝に渡るところの経論

ごせん

しちせんよかん

よ

み

こうぼう

じかく

は五千・七千余卷なり。予ほぼこれを見るに、弘法・慈覚・

ちしよう

せけん

とが

お

ぶつぼう

い

智証においては、世間の科はしばらくこれを置く、仏法に入

ほうぼうだいいち

ひとびと

もう

つては謗法第一の人々と申すなり。

「大乘を誹謗する者は、箭を射るよりも早く地獄に墮つ」

とは如来の金言なり。はたまた、謗法罪の深重なることは、

弘法・慈覚等、一同に定め給い畢わんぬ。

人の語はしばらくこれを置く。釈迦・多宝の二仏の金言

虚妄ならずんば、弘法・慈覚・智証においては、定めて無間

大城に入り、十方分身の諸仏の舌墮落せずんば、日本国中

の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生は、彼の苦岸

等の弟子檀那等のごとく阿鼻地獄に墮ちて、熱鉄の上にお

いて仰臥して九百万億歳、伏臥して九百万億歳、左脇に臥

くひやくまんおくさい みぎわき ふ

くひやくまんおくさい

ねっ

して九百万億歳、右脇に臥して九百万億歳、かくのごとく熱

てつ うえ あ さんぜんろつびやくまんおくさい

のち

鉄の上に在って三千六百万億歳なり。しかして後、この

あび てん たほう う

だいじごく

あ

むしゆ

阿鼻より転じて他方に生まれて、大地獄に在って無数

ひやくせんまんおくな ゆ たさい だいくのう う

百千万億那由他歳、大苦悩を受けん。

かれ しょうじようきよう

ごんだいじよう

は

つみ

う

彼は小乗経をもつて権大乘を破せしも、罪を受くる

いま さんだいし

しんじつ

こと、かくのごとし。いわんや、今の三大師は「いまだ真実

あらわ

きよう

さんぜ

ぶつだ

ほんかい

せつ

は

を顕さず」の経をもつて三世の仏陀の本懐の説を破する

いつさいしゆじようじようぶつ

どう

うしな

のみにあらず、あまつさえ一切衆生成仏の道を失う。

じんじゆう つみ

か

げん

みらい

しよぶつ

きわ

深重の罪は、過・現・未来の諸仏も、いかでかこれを窮む

べけんや、いかでかこれを救うべけんや。  
すく

ほけきよう だいし い すで と いまと まさ と  
法華經の第四に云わく「已に説き、今説き、当に説くべ

し。しかもその中において、この法華經は最もこれ難信  
なか もつと ほけきよう もつと なんしん

難解なり」。また云わく「最もその上に在り」。ならびに菓  
なんげ い もつと かけん

王の十喩等云々。他經においては華嚴・方等・般若・深密・  
おう じゅうゆとううんぬん たきよう けごん ほうどう ほんにや じんみつ

大雲・密嚴・金光明經等の諸教の中に、經々の勝劣こ  
だいうん みつごん こんこうみようきようとう しよきよう なか きようぎよう しようれつ

れを説くといえども、あるいは小乘經に対してこの經  
と しょうじようきよう たい きよう

を第一と曰い、あるいは真俗二諦に対して中道を第一と曰  
だいいち い しんぞくにたい たい ちゅうどう だいいち い

い、あるいは印・真言等を説くをもつて第一となす。これ  
いん しんごんとう と だいいち

せつあ

まった

いこんとう

だいいち

らの説有りといえども、全く已今当の第一にあらざるなり。

まつ

ろんじ

にんしとう

みようしゆうねんつ

もんと

しかれども、末の論師・人師等、謬執年積もり、門徒ま

はんた

た繁多なり。

にちれん

か

えきよう

な

よし

せ

ここに、日蓮、彼の依経に無きの由を責むるあいだ、い

しんい

いだ

ぜひ

きゆうめい

だいもうご

かま

よいよ瞋恚を懐いて、是非を糾明せず、ただ大妄語を構え

こくしゆ

こくじんとう

おうわく

にちれん

そん

ほつ

しゆせん

なん

て国主・国人等を誑惑し、日蓮を損ぜんと欲す。衆千の難を

こうむ

りようご

るざい

くび

ざ

蒙らしむるのみにあらず、両度の流罪、あまつさえ頸の座

およ

だいなん

しの

がた

ふきよう

じようもく

に及ぶ、これなり。これらの大難、忍び難きこと不軽の杖木

す

かんじ

とうじよう

こ

にも過ぎ、はたまた勸持の刀杖にも越えたり。

ほっしほん

まつだい

ほけきよう

ぐつう

もの

また法師品のごとくんば「末代に法華経を弘通せん者は

によらい

つか

ひと

きようせん

やから

つみ

きようしゆ

如来の使いなり。この人を軽賤するの輩の罪は、教主

しやくそん

いつちゆうこう

べつじよ

す

とううんぬん

いま

にほんこく

釈尊を一中劫に蔑如するに過ぎたり」等云々。今の日本国

だいばだつた

だいまんばらもんとう

むけんじごく

お

には、提婆達多・大慢婆羅門等がごとく無間地獄に墮つべ

ざいにん

こくちゆうさんぜんごひやくはちじゆうしちり

あいだ

み

き罪人、國中三千五百八十七里の間に満つるところの

しじゆうごおくはちまんくせんろつびやくごじゆうくにん

しゆじよう

あ

か だい

四十五億八万九千六百五十九人の衆生これ有り。彼の提

ば だいまんとう

むごく

じゆうざい

にほんこく

しじゆうごおくはちまんくせん

婆・大慢等の無極の重罪をこの日本国の四十五億八万九千

ろつびやくごじゆうくにん

たい

きようざい

なか

きようざい

六百五十九人に対せば、軽罪の中の軽罪なり。

と

ことわり

問う。その理、いかん。

こた かれ あくにん まった ほつけ ひぼう  
答う。彼らは悪人たりといえども、全く法華を誹謗する

もの だいはだつた ごうがだいに ひと  
者にはあらざるなり。また提婆達多は恒河第二の人なり。

だいに いっせんたい いま にほん こく しじゅうごおく はちまんくせん  
第二は一闍提なり。今の日本国の四十五億八万九千

ろっびやくごじゅうくにん みな ごうがだいいち ざいにん  
六百五十九人は、皆、恒河第一の罪人なり。

すなわ だいは さんぎやくざい きようもう にほんこく  
しからば則ち、提婆が三逆罪は軽毛のごとし、日本国

かみ あ ひとびと じゅうざい たいせき さだ  
の上に挙ぐるところの人々の重罪はなお大石のごとし。定

ぼんしゃく にほんこく す どうしようどうみよう こくちゆう ひと はな  
めて梵釈も日本国を捨て、同生同名も国中の人を離れ、

てんしようだいじん はちまんたいぼさつ くに しゅご  
天照太神・八幡大菩薩もいかでかこの国を守護せん。

い じしようとう はちじゅういち に さん し ごだい ごにん だいおう  
去ぬる治承等の八十一・二・三・四・五代の五人の大王

よりともしよとき

くに おんあらそ

てんし たみ

と、頼朝・義時と、この国を御諍いあつて、天子と民との

かつせん

ようしゆん

きんちよう

しやうぶ

てんし

合戦なり。なお鷹駿と金鳥との勝負のごとくなれば、天子

よりともしよ

か

ひつじよう

けつじよう

の頼朝等に勝たんこと必定なり、決定なり。しかりとい

ごにん

だいおう

ま

お

うさぎ

ししおう

か

えども、五人の大王は負け畢わんぬ。兔、師子王に勝ちし

ま

そうかい

しず

なり。負くるのみにあらず、あまつさえ、あるいは蒼海に沈

しまじま

はな

ひぼうほつけ

ねんさい

つ

み、あるいは島々に放たる。誹謗法華いまだ年歳を積まざ

とき

こんど

かれ

に

る時、なおもつてかくのごとし。今度は彼に似るべからず。

かれ

こくちゆう

わざわ

彼はただ国中の災いばかりなり。

ゆえ

み

もうこ

ちやうじよういぜん

い

その故は、ほぼこれを見るに、蒙古の牒状已前に、去ぬ

しようか ぶんえいとう おおじしん だいすいせい つ

さいさん

る正嘉・文永等の大地震・大彗星の告げによつて再三これ

そう こくしゆ しんような

を奏すといえども、国主あえて信用無し。しかれども、日蓮

かんもん ぶつゐ かな ゆえ かつせんすで こうじよう

が勘文ほぼ仏意に叶うかの故に、この合戦既に興盛なり。

くに ひとびと こんじよう いちどう しゆらどう お ごしよう

この国の人々、今生には一同に修羅道に堕ち、後生には皆

あびだいじよう い うたが

阿鼻大城に入らんこと疑いなきものなり。

きへん にちれん しだん いちぶん

ここに、貴辺と日蓮とは師檀の一分なり。しかりといえ

うろ えしん こくしゆ したが ゆえ

ども、有漏の依身は国主に随うが故に、この難に値わんと

ほつ かんるい お がた よ たいめん と

欲するか。感涙押さえ難し。いずれの代にか対面を遂げん

いっしん りようぜんじようど

や。ただ一心に靈山浄土を期せらるべきか。

たとい身みはこの難なんに値あうとも、心こころは仏心ぶつしんに同じ。今生こんじょうは  
しゆらどう まじ 後生ごしようは必ずかなら仏国ぶつこくに居こせん。恐々きょうきょう  
修羅道しゆらどうに交まじわるとも、  
きんげん 謹言きんげん。

こうあんしねんうるうしちがつついたち  
弘安四年閏七月一日  
そやじろうにゆうどうどのごへんじ  
曾谷二郎入道殿御返事

にちれん かおう  
日蓮 花押